

## 2022 年度 個人研究実績・成果報告書

2023 年 4 月 23 日

所属	サービス創造学部	職名	教授	氏名	石井 泰幸
研究課題	Society5.0 社会における経営学				
研究キーワード	Society5.0、情報化社会、コミュニケーション、AI	当年度計画に対する達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が達成できた		
関連するSDGs項目	8.働きがいも経済成長も	9.産業と技術革新の基盤をつくろう	該当なし	該当なし	

## 1. 研究成果の概要

私の研究は Society5.0 がいかように社会に影響を及ぼし、それによって経営学がその Society5.0 にいかように反応していくかを学説的に分析していくことであった。確かにコロナ禍という状況の中で Society5.0 が目指すバーチャル空間とフィジカル空間の融合はオンラインやテレワークという形で人々の日常において具体化された。

例えば、私の住んでいる茨城県神栖市といった過疎地域の高齢者の中においてさえ、この言葉は当たり前で語られている。さらに言えば、高齢者自身もオンラインやテレワークが自らの中で日常化されているのを自覚しているのである。これは 10 年前には考えられないことであり、IT 化の進展を阻止する要因は高齢者であるという考え方は完全に覆されることになった。折しも、チャット GPT などの例から示されるように、近年の AI の進展は我々の予想をはるかに超えるものとなっている。つまり、2017 年に閣議決定された Society5.0 はこのコロナ禍を契機として、日常に高度な IT ツールを浸透させていくための起爆剤となったと言えよう。

そして、このような IT ツールは、我々の予想に反して急激な進展を遂げ、絵心が無くとも美しい絵が描け、楽器が演奏できなくても美しい曲を奏でることができるようになった。また、語学力が無くとも IT ツールを使えばコミュニケーションがとれてしまう。しかし、このようなツールだけでは我々の生活は決して豊かなものとはなり得ない。これこそが現代社会に問われる問題の核心なのである。

実際、IT ツールは私たちに様々な夢と希望を与えてきた。IT ツールが我々にバラ色の世界をもたらすことを約束する、そのような言説がまことしやかに巷間で吹聴されてきたのである。しかし、現実には何が起きているのであろうか。我々の心的要因はこの高度 IT 化の中で本当に満たされてきたのであろうか。確かに、オンラインによるテレワーク化によって人々は空間という制約を乗り越えることができた。またオンデマンド化の推進により、二次的、三次的な会議体に出なくてもよくなり、時間的制約も人々は乗り越えることができた。他方で、このような IT 化の進展によって、人々はフェイス to フェイスでコミュニケーションを行う機会を喪失し、適切な人間関係の構築が困難となっているということもまた事実である。

転じて企業に目を向けてみれば、このような IT 化の進展によって、東京に支社を持つことをやめた地方企業は少なくないのが現状である。企業の受付や顧客とのやり取りもまた IT ツールに取って代わられているケースが非常に増えている。このように考えると、企業経営の組織の在り方や組織を集約する管理機能もまた IT 化によって大幅な変貌を遂げているのである。しかし、企業組織は階層や権限といった機械的なシステムを有している一方で、そこで働くのは生身の人間である。したがって、組織を躍動させるためには構成員のモチベーションを高めることが不可欠であるが、上述のような IT ツールがはらむコミュニケーションに関する問題点に鑑みれば、IT 化の進展は組織の躍動をかえって阻害していることもまた否めない。

そこで、我々は企業組織における IT 化の帰結について理解を深めるために、C.I. バーナードに立ち返ることが必要となる。彼は著『経営者の役割』（1938）を自らの協働の考え方でまとめてくくっている。バーナードによれば、協働こそが経営組織の根本問題であり、その協働を実現することは生易しいことではないの

である。彼はこれを自らの実務の立場から切々と語っているのである。しかし、ここで重要なことは、バーナードにとっては、この協働を実現する個人と全体また社会との関係はもはや科学では語りきれないということであった。そのため、彼は最後にこの問題を解決することは哲学と宗教の仕事であると締めくくったのである。そして、彼はプラトンの法律篇を引用し、人は何事も法律で決めてしまうことはできない。これは何においても簡潔に物事を結論付けることはできないと述べているのか。ならば神にゆだねるのかとプラトンは言っているのだ。ならばどうするのか。水先案内人の技術に助けてもらえ。それはまさに哲学の考え方をもちて困難を乗り越えろというほかにならない。

Society5.0 は、確かに我々をバラ色の世界に導くツールかもしれない。しかし、我々はそのツールに振り回されることなく、人間が獲得した哲学の技法をもちて、ツールを有効活用し、現代の社会課題の解決に取り組んでいくことが求められるのである。以上が私が 2022 年度に獲得した研究成果である。

以上が 2022 年度の私の研究の概要であるが、以下に 2022 年度の成果を列記する。

・千葉商科大学哲学研究会主幹（個別の教員との哲学を技法とする本質的探究）

2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

2023 年度に、上記の研究概要を論文化する予定である。

【著書・論文（査読なし）】

2023 年度に、上記の研究概要を論文化する予定である。

【学会発表等】

- ・「論理性の課題とその可能性」、日本産業経済学会第 84 回研究例会、2022 年 6 月 18 日、立教大学
- ・「今後のマネジメントのあり方」、日本産業経済学会第 19 回全国大会、2022 年 9 月 2・3 日、朝日大学
- ・「バーナードの思想的展開」、日本産業経済学会第 85 回研究例会、2022 年 12 月 4 日、千葉商科大学
- ・「バーナードの哲学的考察」、日本産業経済学会哲学研究会、2022 年 10 月 16 日、名古屋学院大学
- ・「非営利金融機関と組織のあり方」、労働金庫市川支店 70 周年記念講演、2022 年 11 月 25 日、労働金庫市川支店（オンライン）

3. 主な経費

2022 年度の研究計画書に沿って適切に支出した。

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

特に無し。

(本文は 2 ページ以内にまとめること)